

- 那賀地域は、県もも栽培面積の約75%（586ha）を占める県内一のもも産地だが、産地内で品質にバラツキがあり、**産地全体として果実品質の底上げを行い、産地評価の向上が課題**。
- 「川中島白桃」は近年単価も良く栽培面積は増加傾向だが、果肉障害の発生が問題となっており、**果肉障害軽減技術の実証・普及によるもも安定生産が課題**。
- このため農業水産振興課では、**「高糖度もも生産技術マニュアル」による技術支援、果肉障害軽減技術マニュアルの作成及び普及に取り組む**。
- 平成29年には、**もも「白鳳」糖度12度以上生産比率10%UP及び「川中島白桃」栽培面積2ha増加（現状68ha）を、目標とする**。

具体的な成果

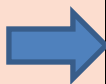
普及指導員の活動

1 高糖度もも生産比率の向上

- 産地全体の品質の底上げにより高糖度もも生産比率を向上。

**「白鳳」糖度12度以上
生産比率 10%UP**

関係機関が連携
して作成した
「高糖度もも
生産マニュアル」
（平成23年3月作成）
を、普及活動に活用



平成27年

- 高糖度もも生産の**実証ほの設置、モデル農家の選定及びマニュアルによる改善策の提案・実施**。
- 果肉障害対策技術の**実証ほの設置**。

平成28年

- 高糖度もも生産の**実証結果に基づくモデル農家への実践支援、研修会等での普及指導**。
- 果肉障害対策技術の**実証ほの設置、対策マニュアル（暫定版）の作成**。

平成29年

- 高糖度もも生産の**実証結果に基づくモデル農家への実践支援、研修会等での普及指導**。
- 果肉障害対策技術の**実証ほの設置、対策マニュアルの作成、研修会等での普及指導**。

2 「川中島白桃」の栽培面積の拡大

- 果肉障害軽減対策技術の実証・普及により「川中島白桃」の栽培面積を拡大。

「川中島白桃」栽培面積

68ha → 69ha（H27年末現在）



- ・ 果肉障害（水浸状果肉褐変症）
- ・ 多発時には若木を中心に発生し収穫量が減少。

普及指導員だからできたこと

- ・ **関係機関との連携を強化**し、農業水産振興課、県果樹試験場かき・もも研究所、JA、大学が協力して作成した**「高糖度もも生産マニュアル」**を活用、連携した活動を強化。

モモ高品質安定生産技術の普及

活動期間：平成 27 年度～ 29 年度

1. 取組の背景

紀の川市は県モモ栽培面積の 75% を占める県内一のモモ産地で、那賀振興局では「高糖度モモ栽培マニュアル」に基づき、平成24年度より平成26年度まで紀の川市桃山町を中心に関係機関と連携して実証圃の設置、研修会の実施等により高糖度モモ生産技術の普及を図ってきた。しかしながら、産地内で品質にバラツキがあり、産地全体として果実品質の底上げを行い、産地評価の向上が課題となっている。

晩生品種の主力「川中島白桃」は果肉が水浸状に褐変する障害（水浸状果肉褐変症。以下「果肉障害」という。）の発生が多く問題となっている。これまで効果的な軽減対策技術が開発されていなかったが、平成25年度より岡山大学、（独）果樹研究所、岡山県、果実袋メーカー等と和歌山県（かき・もも研究所・那賀振興局）との共同研究により果肉障害の発生要因と対策技術の開発に取り組み、マルチ敷設技術など一定の成果が得られたが現地への普及には技術の改良等が必要である。

2. 活動内容（詳細）

（1）関係機関との連携

- 1) J A 紀の里モモ担当者会において普及指導計画の内容と今後の活動について打合せを行い、毎月 2 回 J A 紀の里営農指導担当者会において適宜情報提供と意見交換を行った。
- 2) 平成 27 年 8 月 26 日 J A 紀の里、県農営農対策部、かき・もも研究所とともに平成 27 年産モモの生産状況の確認と次年度の対策について検討を行った。
- 3) かき・もも研究所と果肉障害対策について共同研究を行うとともに、高糖度モモ実証圃の現地巡回を行った。

（2）高糖度モモ生産安定技術の実証

- 1) 現地実証圃 6 カ所を設置して園地状況・生育・果実調査を実施した。
- 2) モデル農家の選定について J A 紀の里と打合せを行うとともに現地巡回を行った。また、園地状況・生育調査を行い、調査結果に基づく改善策の提案を行った。
- 3) 高糖度モモ生産技術の普及に向け、研修会において情報提供を行った。

（3）果肉障害対策技術の実証

- 1) 現地実証圃 3 カ所を設置して果実調査を実施した。
- 2) 共同研究と連携して調査結果や対策技術について検討を行った。
- 3) 果肉障害対策技術の普及に向け、研修会において情報提供を行った。

3. 具体的な成果（詳細）

（1）高糖度モモ生産安定技術の実証

- 1) 平成 27 年産モモは天候不順の影響で産地全体に糖度が引い傾向となったが、樹勢矯正・日照改善実証圃（「白鳳」26 年生）において糖度の改善が確認できた（図 1）。
- 2) モデル農家 14 名を選定し、園地調査結果、選果場データをもとに改善策を提案した。



図 1 実証圃における糖度の推移



写真 1 研修会の様子

(2) 果肉障害対策技術の実証

1) マルチ敷設の効果確認

マルチ敷設実証園（「川中島白桃」6年生、タイベック（ソフト）5/15 敷設）においてマルチ区で裸地区に比べ、障害果の発生は少なかった（図2）。

マルチ敷設時期は7月9日（収穫開始15日前）にタイベック（ソフト）を敷設したが、果肉障害軽減効果の確認は出来なかった。他の知見や作業も考慮すると5月に敷設することが望ましいと考えられた。

マルチ区の果実で濃赤色に着色する場合があります、マルチ資材の検討が必要である。また、マルチ敷設の効果が確認出来ない事例があり、効果的な敷設方法や園地条件の検討が必要と思われた。

2) 着果調整による軽減効果の検討

着果調整実証園（「川中島白桃」6年生）において着果多区は慣行区に比べ、障害果の発生は少なかった（図3）。今後、収穫時期や樹体への影響の検討が必要である。

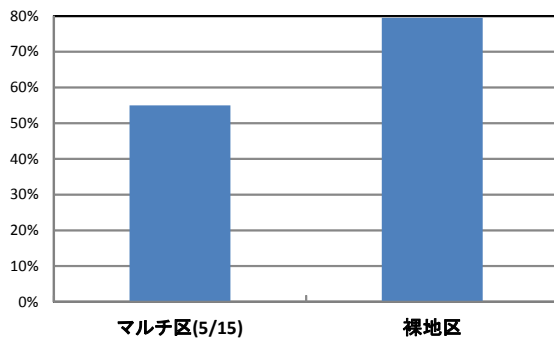


図2 マルチ敷設（障害程度2以上の果実割合）

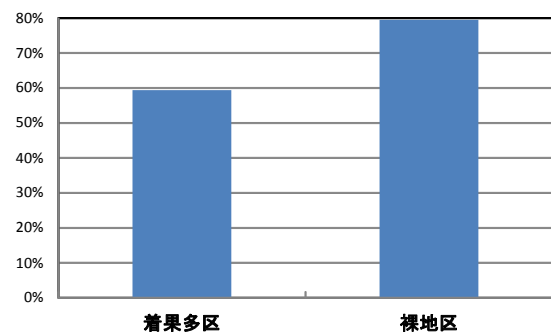


図3 着果調整（障害程度2以上の果実割合）

4. 農家等からの評価・コメント

(1) 高糖度モモ生産安定技術の実証（紀の川市H氏：樹勢矯正・日照改善実証園主）

日照改善による縮伐のため、多少収量は減少したが多くの畑よりも糖度が良くなった。樹勢を落ち着かせ、日当たりを良くすれば糖度が改善できることがわかった。

(2) 果肉障害対策技術の実証（紀の川市K氏：マルチ敷設実証園主）

数値上は効果あったが、若木で全体的に果肉障害の発生が多く収穫量がかなり少なかった。もっと果肉障害を軽減できる技術を開発してほしい。

5. 普及指導員のコメント（那賀振興局地域振興部農業振興課 主任 宮向克則）

(1) 高糖度モモ生産安定技術の実証

これまでの取り組みの中で良い実証事例ができた。今後はモデル農家での取り組みを進めて、産地全体への技術普及につなげていきたい。基本的な園地条件整備や栽培管理が重要であり、継続的な啓発活動が必要である。

(2) 果肉障害対策技術の実証

共同研究及び現地実証の中で普及の可能性がある技術が開発されたが、現地への普及にあたっては解決すべき課題がある。これらの課題を解決するため、現地実証を行い対策技術を確立し、普及を図っていく。

6. 現状・今後の展開等

(1) 高糖度モモ生産安定技術の実証

平成27年のモモ生産状況は開花期の天候不順、果実生育前期の高温、後期の天候不順によりこれまでにない不作の年となった。このため、関係機関と連携しながら基本管理の徹底を啓発しつつ、モデル農家での改善策の取り組みを通じて高糖度モモ生産の推進を図っていく。

(2) 果肉障害対策技術の実証

平成27年は「川中島白桃」の果肉障害の発生が多く、農家の危機意識も高い。開発された果肉障害技術を現地へ普及できる技術として改良し、実証園の設置や研修会を通じて対策技術の実証・普及を図っていく。